

◆伊藤洋二 選 ～「諳んじたい俳句 88」～

鷹羽狩行(監修) 片山由美子(文) 石飛博光(書) 二〇〇五年 日本放送出版協会

福寿草家族のごとくかたまれり 福田蓼汀

ある句会で「猿団子」という言葉を使った俳句が提出された。猿団子とは、冬の寒い時期にニホンザルが集まって、おしくらまんじゅうの様にお互いに身体を温め合う様子のこと。しかし、意味を知らなかった筆者は、「どこの名物団子ですか?」。赤面の猿となった次第であるが、聞くは一時の恥。更に「恥」は耳へんと思いきや心へんだということも学習。

堇程な小さき人に生れたし 夏目漱石

スウィフトの『ガリバー旅行記』の、全身を縛られ小さき人達に囲まれた絵本を思い出した。漱石のかの有名な『吾輩は猫である』は、明治三十八年から翌年にかけて発表された。『堇』は同三十九年の作だが、漱石失望の時代だったとか。漱石にとって堇は、小さくとも前向きで誇りを持って生きるものの象徴だろうか。

滝落ちて群青世界とどろけり 水原秋桜子

西国三十三所観音霊場・第一番札所、青岸渡寺には、日本三名瀑の一つ、那智の大滝がある。落差百三十三mは日本一で、ユネスコの世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」の一部でもある。本堂後方には、那智の滝との調和が美しい朱色の三重の塔がそびえ立ち、必見のフォトスポット。

大鯉のぎいと廻りぬ秋の昼 岡井省二

船村徹作曲、石本美由起作詞の名曲、『矢切の渡し』。♪つれて逃げてよ ついておいでよ … 揺れながら艀(ろ)が咽ぶ 矢切りの渡し … ♪を思い出した。この歌の艀の音は、悲しく咽び泣くような音だったのだろう。艀の原理は魚の鰭(ひれ)の動きに似ているとか。詩人の耳には、大鯉が鰭を動かして移動する時も、船の艀と同じような音が聞こえるのだ。

咳の子のなぞなぞあそびきりもなや 中村汀女

新人研修の時に、「五W一H」ということを習った。「When, Where, Who, What, Why, How」は、情報伝達のポイントである。漢字にすると、「何時、何処、何者、何事、何故、如何」。新人研修は、まるで若鮎が檻に閉じ込められていく最初の儀式であった。あれから喜びも悲しみも幾歳月。定年を迎え、気付けばこの「何何」を卒業して「謎謎」の真ただ中に居るが、様々な檻からは自由になった。滑稽俳句に励み、脳味噌をのびのびと活性化せねば。

石山の石より白し秋の風

芭蕉

再び、西国三十三所観音霊場の旅。第十三番札所、石山寺へ。JR石山駅より徒歩で往く。琵琶湖から流れ出る唯一の川、瀬田川沿いに下る。左手に日本三名橋の瀬田唐橋を観ながら新幹線の橋桁を潜ると、漕艇部の若人達が練習に励んでいる姿が見えてきた。「月日は百代の過客にして行かふ年も又旅人也」。いつの間にか白髪も、この秋風より、あの石よりも疎らになっていた。

◆日根野聖子 選 ～山田貴世『喜神』より～

緩急の緩の流れに番鴨

水の動きに身を任せて、ゆらゆらと揺れている水鳥の姿は、見ているだけでのんびりとした気分になる。人間の目では判別できないが、鳥は水の流れを知っていて、緩やかなところで休んでいる。水になり、鳥になって詠まれた句。

言の葉の刺も包みて春ショール

心のゆとりの無さが、つつい言葉に棘を生やしてしまうもの。言葉が冷たいと人間関係も冷え込んでしまう。齒には衣を、冷たい肩と言葉にはショールを。

蝶の昼重なりて来る招待状

蝶がひらりと舞い込んでくるように、嬉しい知らせが次々に届いた。招待状を開くことと、蝶の羽の動きがイメージの世界で重なる。

自ずから涼しき距離に嫁姑

個々それぞれは良い人なのに、何故か相性が悪くて不仲、ということはよくあ

る。解決方法は、ただ一つ。物理的に距離をとること。他人なら別れて終りだが、身内が最も難しい。お互いに涼しいと感じる距離に落ち着くしかない。

十六夜の月に兎のいる安堵

月には兎もいれば、かぐや姫もいる。と思える人が俳句を詠める。月に兎を見ること、また、そう信じる人がまだいることを知って、読者はほのぼのした気持ちになる。

山田貴世氏は、昭和十六年、静岡生まれ。「波」の主宰。「八木健のCATV俳句」番組では、第五一回放送の「今月の一句」のコーナーで直筆の色紙を紹介。第六十四回にはご出演いただいている。滑稽俳句協会のホームページから閲覧可。